

類骨の形成がみられた。類骨の形成は、病巣の中心部では骨梁辺縁に、菲薄化した皮質骨と接する周辺部では骨梁の骨膜側にのみ、みられた（骨梁全体に占める類骨形成量：病巣中心部 14.3%，周辺部 9.1%）。また、骨梁の周囲細胞における核 1 個当たりの AgNORs 数は、類骨表面 (1.71) と骨表面 (1.10) で有意の差を示した。

考察：1) 病巣中心部は、周辺部に比して骨形成が活発であることを示唆した。2) 皮質骨破壊を伴った病巣周辺部の骨梁での類骨の形成が骨膜側に局在し、量が少ないことは、軽度の外方膨張性を示すと思われた。3) 骨梁における類骨周囲細胞の活性度は高く、病態は動いているが、侵襲性ではないと判断された。

6. In situ hybridization 法を用いた舌の白板症および扁平上皮癌における EB ウイルス RNA の検索

熊本裕行，鎌谷宇明，大家 清（口腔病理）

EB ウイルス (EBV) はヘルペスウイルス科に属する DNA ウイルスで、B リンパ球に感染し伝染性単核症・バーキットリンパ腫を発症する。近年、免疫不全症や臓器移植後の口腔毛状白板症、鼻咽頭癌、胃癌など上皮増殖性疾患での EBV 感染との関連性が報告されている。今回、舌粘膜重層扁平上皮の増殖性疾患と EBV 感染との相関について、in situ hybridization (ISH)

法により検索した。

材料・方法：剖検例の正常舌粘膜上皮 6 例および生検例の白板症 7 例、扁平上皮癌 11 例を用いた。Fluorescein isothiocyanate (FITC) で標識した EBV 関連遺伝子転写産物 EBERs (EBV encoded small RNAs) に相補的なオリゴヌクレオチドをプローブとして hybridization を行い、抗 FITC 抗体およびアルカリフォスファターゼ標識抗免疫グロブリン抗体を反応させ、5-bromo-4-chloro-3-indolyl phosphate (BCIP)/nitro blue tetrazolium (NBT) で発色した。

結果：1. EBV 感染を示す上皮性細胞は、核内で発色が認められた。2. 正常上皮は 6 例中 1 例 (16.7%)、白板症は 7 例中 1 例 (14.3%) が EBV 陽性を示し、いずれも主に有棘層に検出された。3. 扁平上皮癌は 11 例中 2 例 (18.2%) が EBV 陽性を示し、癌巣の非角化部に検出された。

考察：1. EBV は主としてリンパ球や鼻咽頭の上皮細胞を標的とするが、舌粘膜重層扁平上皮に潜在感染し得た。2. 日本の成人のほぼ全てが不顕性感染で抗体陽性であるが、舌粘膜上皮は EBV の陽性率が低く、感染に対する抵抗機構を示唆した。3. 舌の白板症・扁平上皮癌での EBV 陽性率は正常上皮に類似し、EBV 感染と病原性の相関は明らかでなかった。